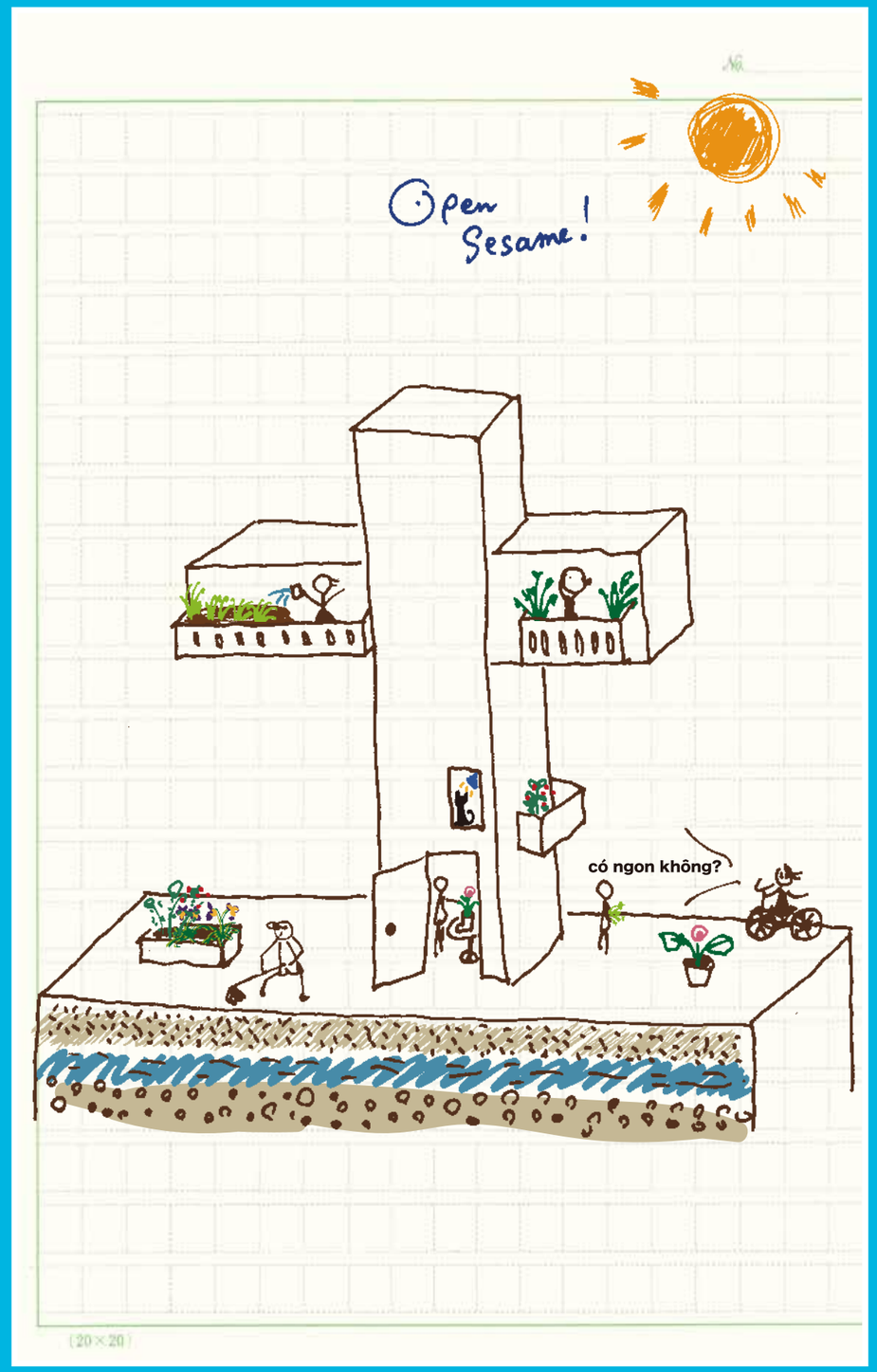
○+△+□=♀


Open Sesame!
có ngon không?

港まちづくり協議会
2020年度報告書

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN
ANNUAL REPORT 2020

Introduction

港まちの小学校の100周年をきっかけに2016年度に始まった「み（ん）なとまちをつくるアーカイブプロジェクト」。まずは歴史探訪と、まちの人々の記憶を尋ね歩いた私たち。しかし、そこで出会したのは、このまちに生きてきた人々の人生でした。その場は、過去への振り返りのみならず、まちの未来へと想いを馳せる語らいの場となりました。やがて私たちは、この活動を基盤にしたまちづくりの展開を考えるようになっていったのです。この報告書では、そんな5年間の取り組みの振り返りを起点としつつ、2021年度の現在進行形のプロジェクト「まちをひらく｜Open Sesame！」についても報告しています。

Contents

01 み（ん）なとまちをつくる アーカイブプロジェクトって?

03 Open Sesame！がひらくもの

05 人々の話を集めたとして、それが一体何になる?!

07 アーカイブプロジェクトで 生まれたもの、集まってきたもの

09 数字で振り返る2020年度データ

港まちづくり協議会 2020年度WEB報告書
WEB｜www.minnatomachi.jp/report/2020.html
※港まちづくり協議会では、冊子版とWEB版の年次報告書をご用意しています。

み（ん）なとまちをつくる アーカイブプロジェクトって？

LOOKING BACK ON 2016 - 2020

1 民俗学者の香月洋一郎さん。現在もゆるやかに、そして温かな激励をいただき続けている。
2 名古屋港開港の1907年（明治40年）に建設された鉄桟橋の歴史とともに港まちの変遷を名古屋港管理組合職員や地域の方々と語り合った。
3 港まちの公設市場にあった魚屋「魚兵」の女将の人気レシピ・いわしのつみれ汁をご本人に伝授いただいた。老若男女が混じり懐かしの風景が現実に立ち上がった。
4 トワイライトスクールにかつてのガキ大将かっちゃんを招き、竹水鉄砲づくり。みんなで打ち合いっこ合戦も大いに盛り上がった。
5 昭和34年の伊勢湾台風の記録として、西築地小学校からアルバムをお借りした。潮水に浸り、ページが開かなくなったものも多いが、そのまま残されていた。
6 約40人のまちに携（たずさ）わる方々に、コロナ禍の緊急事態宣言下において、どのような生活をしていたか、どのようなことを考えたのかを伺った。大人が答えを出せない問題をタブー視せず、子どもたちとも語り合う場を開いた。

まちの人々の声に耳を澄まし、まちの未来までを素描しようとする本プロジェクトでは、リサーチ&展覧会という形式をとりながら、5年間の継続目標を掲げてきました。しかし、それは当初からの目標ではありませんでした。「実践から生まれた仮説を試す、それを何度も繰り返す」。そうしてようやく見えてくるものが、プロジェクトの骨格になっていったのです。ここでは、その概略を振り返ってみます。

展覧会のDM

「まちと話す」という展覧会タイトルから、デザイナーの岡田和奈佳さんに提案されたのが「5つのドット」をあしらったデザインだった。ドットは「点」であるが、個人としての点、それが続いていくことなどが表現されている。

2016
まちと話す
talk with you

「talk with you」の英語コピーは、「あなた」に注目したい旨を示し、「まちと話す」の5文字を模した「•••••」は、ロゴマークとなり5年という目標期間も導かれた。民俗学者の香月洋一郎さんをゲストにトークイベントも開催。港まちの100年を問うことは、日本の近代化の再考にも繋がるという貴重な示唆をいただいた。

1

2017
まちを解く
find your origin

「解（ほど）く」もさることながら、「あなたのルーツを探せ」を意味する英語コピーでさらに難解な展開に。私たちとしては、未来への緒（いとぐち）を探りながら、人々の話を聞き解いてみたいと考えた。聞き書きをヒントにしたワークショップ、まちの方から譲り受けたモノをお持ち帰りできる展示品とする企画がスタート。

2

3

2018
まちを綴る
taste our tracks

まちの方から聞き取ったエピソードやストーリーの効果的な展示方法を模索するなかで、それらを小冊子に綴（と）じる企画が生まれた。「綴（つづ）る」には、「かすれたところをつなぎ合わせる」の意味もある。古い浴衣をワンピースにするワークショップでは、想定外の長丁場に。参加者とも苦楽を共にする貴重な体験を味わった。

4

2019
まちが語る
telling our story

将来的なプロジェクトの自走を願った4年目のタイトルは、シンプルに「まちが語る」とし、私たちは地域の主体形成を目指したさまざまな実験にも挑んだ。企画は盛況だったものの、意図した通りには進まないものも見受けられた。また今後の自主的な展開への手がかりは掴みきれず、焦燥感も拭いきれなかった。

5

2020
まちを残す
people talk about what they do

触れるな、離れろ、疑え。新型コロナによって人が集うこと、繋がる行為が制限され、まちづくりの本質的な意味が問い直される中で生まれたのが「まちを残す」だった。英語は、S.ターケルの『WORKING』へのオマージュ。プロジェクトは5年目にして、一人ひとりの声に耳を傾けるという原点に回帰した。

6

6

続 まちを残す
people talk about what they do のエトセトラ

次年度以降の展開を検討することを念頭に、追加展示とトークイベントをシリーズで開催した。展示は、アーカイブの残し方として、文章だけでなく、歌、声といったバリエーションを試みた。トークは、まちを舞台にさまざまな分野で活躍する実践者をゲストにお話を伺った。ゲストの方々との繋がりはその後も広がっている。

2021年度アーカイブプロジェクトの挑戦

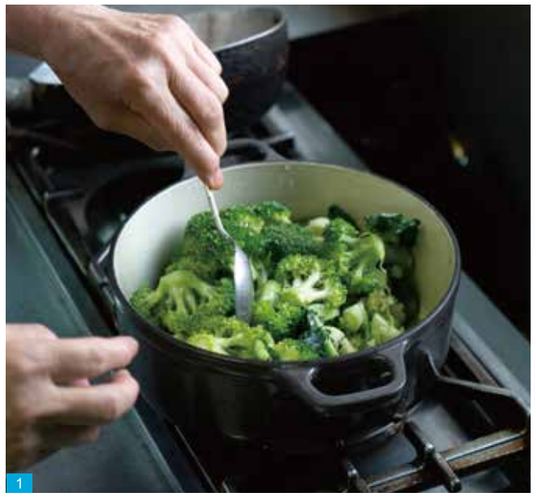
Open Sesame！がひらくもの

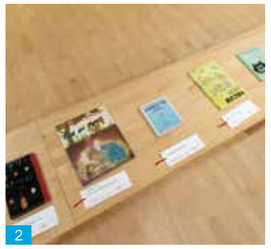
「Open Sesame！」と言えば「ひらけ ごま！」ですが、もちろん私たちはアリババでも40人の盗賊でもありません。では、そんな呪(まじな)いじみた言葉をひっさげて、私たちはまちの何をひらこうとしているのでしょうか。

テキスト｜古橋敬一

1 陶芸家・美術家の本原令子さんとのプロジェクト「Chatting in the kitchen ー台所でおしゃべりー」の様子。毎回、向かう道すがらや訪れたお宅のお庭で植物を摘み、ブーツ形の陶器に生ける。9月末時点、5組のお家に伺い、月ごとに写真や会話、イラストなどを組み合わせた経過報告を会場に展示している。「人の話を聞いたら、世界とつながった」と本原さん。

2 み（ん）なとまちをつくるアーカイブプロジェクトの展覧会「まちをひらく」の様子。本をテーマにした巡回展では、思い出に残るオススメの一冊を紹介いただき、しおりにコメントを掲載して展示した。映画をテーマにした展覧会では、かつて港まちにあった映画館やそこで見た映画についてなど、まちの方のエピソードを軸に取りまとめた諸々の探訪（／リサーチ）を紹介した。期間中にはエピソードに関連したミニシアターイベントも開催した。





アーカイブでまちは変わるのか？

2021年6月より私たちが取り掛かったアーカイブプロジェクトのタイトルは、「まちをひらく｜Open Sesame！」。5年間の取り組みを踏まえ、コンセプチュアルなロゴの「•••••」から離れ、日英併記は引き継ぎつつ、「漢字」は使わないことにした。そして、「3つのテーマを約2ヶ月ごとに入れ替える企画展示」＋「半年間続くアクションリサーチ」というセット形式で3年間を目安にした新たな挑戦をスタートさせている。

人間の暮らし方や働き方が急速に流動化していく現代では、生活圏が拡張する一方で、具体的な地域やコミュニティにおける関係性の希薄化が著しい。現代都市生活者が、自分の暮らす地域のまちづくりに関われないのは、社会構造上の問題でもあるのだ。そんな時代のまちづくりに平坦な道のりは見当たらず、前途多難という言葉が重くのし掛かる。また近頃は、未知のウイルスまで登場し、医療はひっ迫し経済も停滞している。肝心の政治は迷走し、時代の闇は深まるばかりだ。

そんな状況の中、一人ひとりの生活者の声を聞き書きするという行為は、ドンキホーテさながらのおとぼけ、或いは狂気なのか。「人の話なんか聞いてどうするの？それよりこの死んだような街をどうにかしてよ。それがあんたらの仕事でしょ？」云々(うんぬん)。辛辣(しんらつ)な意見に、言葉に窮(きゅう)したことも1度や2度ではない。それでも私たちは人々を訪ねて行き、その声に耳を澄まし、そして書き綴ってきた。言うに尽くせない魅力と可能性を、この実践の中に感じてしまっている私たち。簡単には諦められないのである。

——

集まれないけど、集められる

コロナ禍では、数多くの人は集まれない。まちづくりからすれば致命的な事態だが、私たちは既に数々の聞き書き、それに関する写真やモノを集めていた。その実践は、街と人や過去と未来を繋ぐための場でもあった。そして、そのアプローチは、コロナ禍においても有効ではないかと仮定し、「まちをひらく｜Open Sesame！」では、「本・映画・つくる」という3つのテーマの巡回展を企てた。個人が深いところで大切にするものには、普遍に通じる公共性があるというのは、これまでの実践により私たちが生成した仮説でもあるが、自分のとっておきの本や映画を誰かにオススメしたり、シェアするのは自然な心情ではないか。実際にやってみると、活字離れとか、映画は既に娯楽の象徴ではなくなって久しいなどの課題も見えてきて苦戦を強いられてもいるが、課題に追われるのは毎度のこと。それらのテーマや課題の最前線で奮闘する人々に出会えることは貴重な体験となっている。

——

人の話を集めたとして、それが一体何になる?!

プロジェクトのもう一つの柱が、アーティストの本原令子さんとの半年間の試み。「Chatting in the kitchen ー台所でおしゃべりー」と題し、本原さんと港まちの人々の台所を訪問し、そのお家(うち)の定番料理を教わりながら、交わされた会話を軸にしたメモワールをまとめる。この試みは、プロジェクトコピーでもある「人の話を集めたとして、それが一体何になる?!」に対する本原さんからの応答だ。しかし、本原さんからすれば、どこの誰の台所なのか、私たちからしても、何の料理でどんな会話になるのか、まるでコントロールが利かない。ただ訪ね、共に料理し、会話を楽しむだけの繰り返し。にもかかわらず、毎回異なる気づきと発見があり、驚嘆と興奮が広がり、時には涙もしてしまう。なぜそんなことが起きるのか。本原さんは、「台所は人と社会の接点」と指摘する。そんな汽水域(きすいいき)で語られるプライベートなおしゃべりには、知らずとパブリックへと通じる普遍的な何かが入り混じるのかもしれない。本原さん曰く「毎日地球上で20億人ぐらいごはんをつくってる」。どこかで聞いた「多中心」という言葉が頭をよぎる。大切な中心は世界に数多くある。本原さんの台所への旅は、まだまだ始まったばかりなのだ。

——

私たちをひらく

こうして振り返ってみると「まちをひらく｜Open Sesame！」は、つくづくオープンエンドな取り組みになっていると実感する。オープンエンドとは、終わりをひらく、目的を定めないという意味。解決を焦るのではなく、そこに起きる出来事との関わりこそを大切にする。そして、その関わりのプロセスで出会う人々と私、つまり私たちがその関係性の中でお互いに影響を受け合いながら、ゆるやかに変化していくことを肯定的に受け止めていく。或いは、街が変わっていくとはそういうことかもしれない。そのためにも、私たち自身は、よりひらかれた態度であることに努めたいと考えている。

アーカイブプロジェクトから生まれた問い

人々の話を集めたとして、それが一体何になる?!

6年目に突入した「み（ん）なとまちをつくるアーカイブプロジェクト」から生まれた「人々の話を集めたとして、それが一体何になる?!」という問い。話を集める（聞き・書く）という行為には、どのような意味があるのでしょうか。聞き書きした人された人、そのテキストに触れた人、そして客観的な立場の専門家の声やテキストから問いの答えを探ります。

※石田さんのメモ

私の宝物。八十才近くなって、
こんなすてきな言葉をもらうとは…。

ここでは、本プロジェクトから生まれたテキスト（ポットラック新聞掲載「港まちのにぎやかな民俗誌」）をきっかけに港まちの活動に継続的に参加している大学生の声、また学生たちからのインタビューに協力してくれたまちの人の声をご紹介します。

大石茉幸

おおいし まゆき

名古屋芸術大学大学生

「人の話を集めて、まちづくりが成り立つのかな?」って確かに思いますよね（笑）。でも、私は民俗誌を読んで、港まちに行ってみたいって思いました。あの新聞全体からもそういう雰囲気は感じたんですけど、講義もおもしろいなって思ったんです。来てみてですか?びっくりしました。古橋先生が本当に、当たり前みたいに地域の皆さんとご挨拶したり、話しかけたりするじゃないですか（笑）。「今の時代に、人との距離って、そんなに近くなれるんだ！」ってことが驚きで…。なんていうか、今、私が住んでいるところでは、そんな気軽に他人に話しかけられるような状態じゃないっていうか、きっと昔はもっと当たり前だったかもしれないですけど、今はもう全然。だから、逆にここが新鮮で。これがもっと広がったらいいし、自分もそれにもっと関わっていきたいなって思ってますね。初めて港まちに来た頃は、特に自分自身がめっちゃ模索してた時だったんで、いろいろ調べてたんですけど、ここで起きていることって、Webとかでも見れるし、しょっちゅういろいろあるから予定も立てやすい。乗り込みやすいっていうか、来やすいなって。これからも、いろいろ関わりたいなって思っていますけど、いいですか?（笑）

石田久江

いしだ ひさえ

港まち在住

これ（学生による聞き書き）をもらったときに書いて残しておいたメモ（※）が出て来た（笑）。え？載せるの？そんなの恥ずかしいわよ。どうだったか？うん、みんなお世辞がうまいな（笑）。いや冗談抜きで、年寄りを喜ばせてくれるのが上手、ホントにね。人間と人間との会話って言うのかなぁ。そういうやりとりができて凄く楽しかった。そんなふうに解釈したな。この書いたのを読ませてもらって、余計にそう思った。言葉と文とはまた違うもんだね。書いてもらったのを読むと、私の話をよく聞いとってくれたんだと思うよ。まちづくりの仕事って、難しいわな。世の中もどんどん変わってくしな。そんでも、やり甲斐があるわな。やめられんだろ？私が嬉しかったのは、この「かわいいおばあちゃん」って言葉よ。そうだなぁそれこそ20歳ぐらいの頃から「私は歳とったらかわいいおばあちゃんになりたいんだ」って思っとったんだけど、そんなように書いてくれた人が多かったのよ。私の願いが叶ったじゃん！ってね（笑）。

| 担当スタッフの振り返り |

論じる前を誌す

古橋敬一

ポットラック新聞に掲載中の聞き書き「港まちのにぎやかな民俗誌」は、このアーカイブプロジェクトからのスピンオフ。私はそれを大学で受け持つ「まちづくり」や「地域文化論」の講義にも活用しています。人々の話を聞き、それを綴ったテキストの読解が、人と社会とその関係のリアルを見つめ、また考察していく端緒になると考えるからです。現代のまちづくりでは、現実のまちの「在り方」をどう捉えるのかが問題。しかしそれは、目前の現場の出来事の中にこそ立ち現れる。私たちが現場で何かに触れる、或いは関わり合う中でしか、そのまちのらしさや在り方は捉えられない。そして、聞き書きはその直接的な接点での出来事を素描し記述した貴重な資料なのです。民俗学者の香月洋一郎さんは、近年の著作で体型的な「論」を組み立てる以前の「誌」の大切さと豊かさについて言及しています。民俗誌の中に浮かぶ風景に憧れを抱いた大学生の大石さんは、港まちの中に新しい風景を生み出そうとする連帯の中に飛び込み奮闘を始めています。また、石田さんのテキストに触れ、実際に自分たちでもインタビューを試みた学生たちが新たに綴った文章は、石田さんの心を温かく包みました。人の心が動き、行動が変わる。その一つひとつはささやかかもしれませんが、まちづくりに欠かせない重要な出来事。それが、人の或はその接点の内側から湧き出す。聞き書きを誌したテキストには、そんな不思議な力が秘められているような気がしています。

「話を聞いていく」を積み重ねる

児玉美香

アーカイブプロジェクトの5年間では、たくさんお話を聞かせていただいた。港まちがにぎわっていた頃のこと、伊勢湾台風やみなと祭、日々の暮らしや仕事の話。お話を伺うことは、港まちのことを知るだけでなく、なにより私自身が勇気づけられてきた。どんな人にも悩んだり苦しんだりする時が当たり前にあって、それでも人生をたくましく生きている姿に、勝手に励まされていた。いろいろな人間模様はありながら、その地に根を下ろして、人とつながりながら暮らしている姿からは、まちで暮らしていくとはどういうことなのかを私自身が自分ごととして考える機会にもなった。でもそれはあくまでも私にとってであって、これが「まちづくり」になるかどうかについてははっきりと肯定できないでいた。2020年度に開催したトークシリーズ、今年の「まちをひらく」でのリサーチや本原さんのプロジェクトなどでは、改めてまちの方にお話を伺う機会があった。それはその人の新たな一面を知ることになったりして、よりその人が身近になっていった。だんだんと、こういった「話を聞いていく」積み重ねは、まちにアダプトしていく方法として有効と言えるだろうと感じるようになった。それは私にとってだけでなく、まちに住む人同士が関心を持つきっかけとしても、それがお互いの信頼関係につながっていくという意味でも。そういったつながりが、暮らしの基盤になっていき、「まちづくり」が動いていくのだろうと思う。

阪神・淡路大震災の被災者の声を手記集として出版する活動に従事し、また災厄の経験を表現する人々との協働を実践する研究者でもある高森順子さんにテキストを執筆いただきました。言及いただいたのは、本原令子さんとの「Chatting in the kitchen」が中心ですが、本プロジェクトやまちづくりとは何かの本質についてまでも書き綴ってくださいました。

COLUMN

「まち」を記録するということ

文：高森順子

「まちづくり」は、とてもやっかいな言葉だと思う。

「まち」というのはそもそも「つくる」ことができるのだろうか。私たちの目の前にはもうすでに「まち」があるし、その「まち」はそこに住む人や、そこへやってくる人の意思通りに固定化されたり、あるいは変化したりするわけではない。「まち」には、人間がダイレクトに対象を変化させることを意図する「つくる」という言葉はそぐわないように思うほどに、人間のコントロール下に置くことが困難な生き物のようだ。

「み（ん）なとまちをつくるアーカイブプロジェクト」の5年間には、1年ごとにテーマとなるキーワードが付されている。「まちと話す」、「まちを解く」、「まちを綴る」、「まちが語る」、「まちを残す」。それらは、「まち」が目的語であったり、主語であったりする。よくよく考えると不思議な言葉だ。「人と話す」のでも「人が語る」のでもない。「“私たちが”まちを解く、綴る、残す」のでもない。一人一人の人間の意志なるものは後景化していて、その代わりに焦点があたっているのが「まち」だ。

港まちづくり協議会がアーカイブしようとする「まち」は、確かに私たちの目の前に広がっているけれども、その「まち」の本質なるもの、いわゆる、そのまち“らしさ”を捉えるためには技術がいる。それは、港まちで生まれ育ってうん十年の○○さんにはその技術がそなわっていて、神戸生まれ、名古屋在住4年目の私はその技術を持ち合わせていない、というような単純なものでもない。外部者だからわからなくて、内部者だから知り尽くしている、ということでもないのである。そのまち“らしさ”は、そのまちに馴化（じゅんか）し、既知のものであると一旦規定してしまうと、それを“らしさ”として発見することが難しくなることがある。逆に、すべてを未知のものとして感知すれば、そのなかの何が独特で特別なのか、見極めることができない。では、そのまち“らしさ”はどこにあるのか。きっとそれは、新参の外部者と、古参の内部者が互いの視線の先を分かち合い、語り合うことで、ようやく発見することができるものなのかもしれない。

港まちづくり協議会のアーカイブプロジェクトの取り組みの一つとして行われている、美術家である本原令子さんとの共同実践「Chatting in the kitchen－台所でおしゃべりー」は、外からやってきた本原さんの視線と、港まちに暮らす人々の視線が交差し、そのどちらか一方では見過ごしてしまう、まち“らしさ”を発見し、記録し、それをさらに別の誰かへと届ける試みだ。彼女は小さなブーツ形の陶器を携えて、今日お話を伺う方の家へ、協議会のみなさんとともに向かう。その道すがら、彼女は街路に生える草花を摘む。家へ着くと、皆とともに食事をつくる。完成した料理たちがテーブルに並べられるなか、持ってきた小さなブーツをその傍らにちょこんと置いて、草花を生ける。そして、皆で食事をする。その過程で交わされる会話は、歩いたり、手を動かしたりといった、目的のある動作の“片手間”に行われているものだ。このプロジェクトでは、そういう“片手間”のなかで展開された会話を記録していく。それは、語りを聞くために行われるインタビューとは全く異なる性質を持つ。インタビューとは、記録するという目的を、語る側も、聞く側も、つねに意識した状態で行われる。一方、このプロジェクトにおいての会話は、料理をつくり、食べるという目的の陰に隠れている。その意味では、ここで交わされる会話は“自然”なやりとりに近い。人々は話すでもなく話し、聞くでもなく聞いている。ただ、当然のことながら、このやりとりには録音をするであるとか、シャッターを切るであるとかといった、“記録”という行為が並走してもいる。つまり、ここで展開されるやりとりは、“自然”に近いかたちではあるものの、人の手によって特別に設（しつら）えられたものでもある。

本原さんが持参する小さなブーツの陶器は土からできている。そして、それは本原さんの手によって生み出されている。小さなブーツは、自然のものであり、かつ、人工のものである、といえるだろう。それは、「Chatting in the kitchen」で展開されるやりとりの性質と重なる。自然であり、人工でもあるという両義性をもつことは、特別なことではない。それは「まち」についても同じだ。「まち」は、その姿をすべてコントロールできると全能感に浸り、思い通りに「つくる」ことができると驕（おご）れば、いつか歪みが生まれるだろう。逆に、私たちの意志などというものは幻想に過ぎず、すべては環境によって決まるのだとして、「まち」を手懐（てなず）けることを諦めれば、荒れ果ててしまうだろう。

自然を受け入れつつ、自然に手を入れる。私たちの意志なるものの外を感じながら、意思の力を信じることも諦めない。どちらにも揺れ、そのどちらも尊いものとして認め、その揺れの中で生まれる偶然の出会いを言祝（ことほ）ぐ。本原さんの小さなブーツは、そんな動きのなかで出会う人々への感謝のかたちなのかもしれない。

高森順子

たかもり じゅんこ

1984年神戸市生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科修了。博士（人間科学）。愛知淑徳大学助教。専門はグループ・ダイナミックス。2010年より阪神・淡路大震災の手記集制作を行う「阪神大震災を記録しつづける会」事務局長。2014年に井植文化賞受賞。2011年より3年間「人と防災未来センター」において災害アーカイブに関する実務を担当。被災体験の分有の場の創出に関するアクションリサーチを継続している。

こんな成果もありました

アーカイブプロジェクトで生まれたもの、集まってきたもの

5年間のプロジェクトを通して、まちの人から写真やものをいただいたり、お話から得たアイデアをもとにワークショップを開催したりと、いくつかの繋がりや展開がありました。ここでは、そんなプロジェクトから生まれたものや集まってきたユニークな顔ぶれをご紹介します！

いらんもの

まちの人と話していると「これ、いらんから、持っていってくれない？」と言われることがたびたびあります。
どうやらそれは、まちのみなさんの「いらんもの」のようですが、どれもかわいくて、味わい深い逸品なのです。
中には、新しい引き取り手にもらわれていったものもあります。

ジュークボックス

かつて港まちにあった船員バー「ドリーム」に置いてあったもの。まだまだ現役で、コインを入れて番号ボタンを押すと、いい音色を聞かせてくれます。

職人がつくった桶

昔、海運会社は数百個の水桶を船に乗せていて、飲み水として使ったり、汗を流すために柄杓で水をかけたりしていたそう。この桶は、堀川と中川運河をつなぐ横堀沿いにあった桶屋「桶清」の職人がつくったもの。

伊勢湾台風の痕跡が残る箪笥

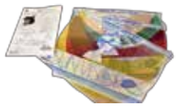
まちの人からもらってきた古箪笥。裏を見てみると、背面の下半分にくっきりと残る水のシミ跡を発見。ちょっと前までは、港まちの古い家ならどの家にも台風の水跡があったらしい。

コーヒーカップセット

砂糖入れまでついた、花柄で上品なセット。カップを片手に優雅なひと時が過ごせそう。箱に入ったこういうセットがよく集まってきます。

おにぎりの型

もう、どこからきたのかわかりません（笑）が、小さめのかわいいおむすびができそうです。オブジェとしてもおすすめ。



サンバイザー（手芸用品）

かぎ編みで帽子部分を編み、このサンバイザーを取り付けると、夏に便利な大きなひさし付きの帽子が出来上がります。色も赤・黄・緑と選べます。

茶釜

港まちの人は、お茶を嗜（たしな）んでいる方が多い。「もうお茶やらなくなったから」と、この茶釜を含め、茶碗や茶さじなどをいただきました。

港まちカルタ

港まちの歴史や文化に日々の暮らしなど、さまざまな事柄を学べるカルタ。読み札は愛知淑徳大学の学生さんが、港まちのみなさんにアドバイスをいただきながら制作。絵札は名東高校美術部のみなさんが制作しました。アーカイブプロジェクトでお聞きしたエピソードも絵札になっています。

それいいなをやってみる

まちの人の話を聞いていると、その時の光景やまちなかの風景なんかが浮かんできて、思わず「それいいな」と思ってしまいます。
それなら、教えてもらってみんなでやってみよう！ということで、実際にやってみました。

みんなが集う縁台づくり

昔の港まちでは、商店や家々の軒先に縁台が置いてあって、みんなで囲碁や将棋を打っていたそう。そんな光景に憧れて、まちの人に教えてもらいながら縁台づくり。最後は縁台に座っておにぎりをいただきました。

浴衣を綴ってつくるワンピース

港まちで手芸店を営んでいた方を先生に迎え、浴衣からワンピースをつくりました。3時間でつくれるはずが、実際は3日かかってしまい…。自分たちの手で服をつくっていたというお母さんたちのたくましさを感じたイベントでした。

シンプルだけど楽しい竹水鉄砲づくり

戦後は物も乏（とぼ）しかったはずなのに、まちの人に伺えば、なんだか羨ましくなるほど楽しそうな話をしてくれる。そこで、かつてのガキ大将かっちゃんを招き、みんなで竹水鉄砲づくり。のこぎりを初めて使う子も。打ち合いっこをして盛り上がりました。

記憶の虫食い地図

昭和19年ごろの港まちのことを知る方々に集まっていただき、記憶の地図を作成。街並みが違っていたり、今では想像できないほどの多様なお店があったり。その後の聞き書きにも、記憶の地図が役に立つ場面もありました。ちなみに「虫食い」とは、個々の記憶をもとにしているので、抜けている部分や間違っているところもあるよ、という意味。

記憶を頼りに地図をつくる

MOYAKO MAGAZINE

INFO 取材してもらいました

5年間のアーカイブプロジェクトの取り組みと、これからの展開について取材していただきました。MOYAKO MAGAZINE「聞き書きで探る港まちのアイデンティティ」（2021.2.22）

https://yattokame.jp/yattokamelife/moyako/climate/986.html

INFO リトルプレスができました

アーカイブ展で展示した「いらんもの」に、デザイナーの小島邦康さんがユニークな見立てをしてくださいました。なんとその取り組みがリトルプレスになりました。

https://artical.in

数字で振り返る2020年度データ

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN ANNUAL REPORT 2020 DATA

開催事業数・テーマ別事業パートナー数

項目	開催事業数	テーマ別事業パートナー数
○ 暮らす｜LIVES	106	23
△ 集う｜MEETS	35	118
□ 創る｜CREATES	49	43
名古屋市要望事業	5	5

港まちづくり協議会の活動参加者数

○＋△＋□＝ 延べ 18,320人　※オンラインで開催した事業の参加者数は含まず

メディア掲載実績

2020年度のメディア掲載数は計37件でした。昨年度に比べると、WEBでの掲載数が2倍以上に増えている一方、テレビやラジオ番組での掲載は0件となりました。コロナ禍において、情報を伝える方法にも変化が生じている中、私たちの取り組みをより多くの方に知っていただくためにはどうしたら良いのかを模索しながら、その時代にあったまちづくりが行えるよう努めてまいります。

新聞	WEB	テレビ	ラジオ	雑誌・広報誌	合計
5	26	0	0	6	37

会計報告

2020年度の収入額は67,700,116円、支出額は67,124,273円で収支差額は575,843円となりました。支出内訳としては、「○心地よく安心な港まちで『暮らす』」が6,299,541円、「△魅力的でにぎやかな港まちに『集う』」が12,502,542円、「□みんなと港まちを『創る』」が48,322,190円（事務局運営費26,744,768円を含む）です。収支差額575,843円を名古屋市に返還しました。

項目	予算額	決算額
収入	67,700,000	67,700,116
支出	67,700,000	67,124,273
○ 暮らす｜LIVES	5,617,000	6,299,541
△ 集う｜MEETS	12,436,000	12,502,542
□ 創る｜CREATES	49,647,000	48,322,190
収支差額	0	575,843

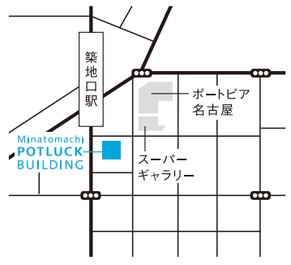
（円）

2020年度 港まちづくり協議会メンバー（令和2年4月22日現在）

会長　早川 勝利（西築地学区連絡協議会推せん）
副会長　水谷 光貴（築地口商店街振興組合推せん）
　下村 卓也（名古屋市港区役所区政部長）
委員　河田 正巳（西築地学区連絡協議会推せん）
　安井 宗敬（西築地学区連絡協議会推せん）
　松本 一男（西築地学区連絡協議会推せん）
　大口 靖夫（西築地学区連絡協議会推せん）
　斉藤 俊宏（名古屋市総務局総合調整部総合調整室長）
　大谷 達哉（名古屋市スポーツ市民局地域振興部地域振興課長）
　前川 滋美（名古屋市住宅都市局都市整備部名港開発振興課長）
　箕浦 慎治（名古屋市緑政土木局港土木事務所長）
事務局長　木村 仁（名古屋市港区役所企画経理室長）
事務局次長　古橋 敬一
事務局員　岡西 康太
　児玉 美香
　大西 未来
　竹内 希

制作　港まちづくり協議会
編集　古橋 敬一、児玉 美香
表紙作品　本原 令子
編集アドバイザー　竹内 厚（Re:s）
写真　藤井 昌美、三浦 知也、村上 将城、
　倉田 果奈（港まちづくり協議会事務局）
デザイン　株式会社クーグート
印刷・製本　株式会社東海共同印刷
発行　港まちづくり協議会
　〒455-0037 名古屋市港区名港1-19-23
　Minatomachi POTLUCK BUILDING
　TEL｜052-654-8911　FAX｜052-654-8912
　E-MAIL｜info@minnatomachi.jp
　WEB｜www.minnatomachi.jp
　2021年11月発行

WEB編集　大西 未来
WEBデザイン　プチグラフィックス



Cover story

本原令子 陶芸家・美術家

港まちの台所にうかがって定番料理を教わりながら会話を記録するプロジェクトでは、その道すがら見つけた植物を小さな陶製ブーツに生けて食卓に置く。街にいろんな草花が根付いていて、雑草だと思っていた植物を揚げて食べる方もいて驚く。地面から離れたマンションのバルコニーでは生ゴミが土で堆肥となり、花を育てている。つまみ喰いしたまち協のハーブガーデンも結局のところ、土が大切。